

### 教育上の課題と工夫

コロナ禍の影響で従来の臨地実習が不可能となった際も、実習目標は落とさずに教育の質の担保をするようにと本学から教育方針が出された。

2020～2021年度の2年間、4年次のクリティカル緩和ケア実習（1クール2週間：3クール実施）は、遠隔と学内実習を組み合わせたハイブリッド実習に取り組んだ。工夫した点は以下の通りである。遠隔実習として、①多様なメディアの活用（学生の周手術期の患者の理解を深めた上での看護計画の立案）、②Zoomを用いての医療専門職との質疑応答、③学生と教員のカンファレンスでの丁寧な振り返りを行った。

学内実習として、①病棟実習のように、事例※を用いて学内実習を展開した。

※事例：50歳代、男性、ストマ造設術を受ける患者・家族の設定を行った。患者の情報として手術2日前、手術中、手術直後、手術後1日目～5日目の経過記録と患者情報シートを作成した。

1. 遠隔実習：①手術内容や患者の病態の理解の促進のため、eLearningを活用した。ストマ造設患者の手術の映像の視聴、ストマ造設する患者の心理社会的な問題に対する看護師の関わり方の映像を視聴することで学生が周手術期の患者・家族の状況の理解を促した。学生は配布された事例の情報を基に、データベース、アセスメント、看護計画立案を行った。②実習病棟との協働で、遠隔でも病棟の状況がわかるような動画等の作成を実習予定であった施設へ依頼し、学生はその映像を視聴後にZoomで医師、看護師、ソーシャルワーカーとの対話・質疑応答の時間を設けた。③Zoomを活用してのグループカンファレンスを毎日実施し、学生の疑問あるいは学生間での情報の共有、学びの振り返りを行い
2. 学内実習：D. コルブの経験学習理論を基にシミュレーションを活用した学内実習を実施した。その際に、全ての学生がシミュレーションを体験できるように工夫した。一人の学生の持ち時間を30分で設定した。その内容は、計画の報告（5分）、看護計画の実施（10分）、SBARを用いての報告（5分）、デブリーフィング（10分）で組み立てた。

学生の評価として、「手術前・手術中の映像を視聴することにより、周手術期の患者のイメージができた」、「実際に専門職からの体験談などを聞けて学びが深まった」、「同一事例であるが、学生によってアセスメントや患者（モデル人形）への声かけ、看護ケアのやり方が異なっており、他学生の観察をすることで理解が深まった」などがあった。一方、患者や家族の心理社会的な側面に関して、「情報を捉えるのが難しい」との意見もあった。

---

### With コロナに向けて

コロナ禍の影響で、臨地実習の代替案としてのハイブリッド実習から学んだことは、学生が学びを深めるために、どのようにしたらいいのかを教員は考え、制限がある中でも、環境や教育方法を工夫することで学生の学びが深まることがわかった。より、効果的な教育を行うためには、学生からの評価を取り入れるなど教育と研究をリンクさせ、看護教育の質の保証を行いたい。

---